

Recording Atomic-Flash Burns, Archiving and its Living Legacy

【概要】

広島と長崎への原爆投下により、被害者は新しい複合的な傷害と病を被った。多くの人が命を落とし、第二次世界大戦終了後も長年にわたって犠牲者は増え続けた。医学史の分野では、最初期の原爆被害者が負った傷害についての議論の中心となっていたのは熱傷だった。そして、それらの経験がのちに多くの西洋国家における緊急医療の発展に影響を与えた。例えば、バーミンガム事故病院の医学研究審議会熱傷ユニット長レオナルド・コールブルックは、1950年の著作「A New Approach to the Treatment for Burns and Scalds」において、戦後コミュニティの医療ニーズを支えるためには熱傷ユニット（著作内で記された「理想的」なものも含めて）が不可欠であることを示した。熱傷ユニットが特に不可欠であるとされたのは、アメリカとソ連との間で軍拡競争が開始され核戦争の脅威が増大していたことによるものである。それから二十年ほどが経過した冷戦期に行われた緊急医療サービスを組織化する議論においても、原爆の被害はしっかりと中心に据えられていた。

原爆によって引き起こされる熱傷と異なり、当初、放射能による影響は明らかではなかった。しかしながら、放射能による病が顕著になってくると、全体の傷害の25%を占めた熱傷の被害は徐々に見過ごされるようになった。なぜなら、放射能による病は人類にとって新しく、深刻であったためだ。それでも、熱傷被害も生命やアイデンティティを放射線障害同様に傷つけるものだ。しかし、原爆のこの側面に関する研究は未だ不十分である。また、熱傷は二種類の傷をもたらす。一つが身体的なもの、もう一つが精神的なものだ。後者の影響は放射線のように見えないままであることがしばしばある。

このセミナーでは、ライナーツ教授が熱傷被害とアイデンティティの歴史に関する広範な研究活動を紹介し、広島と長崎での原爆投下が人間の健康にもたらした影響はどのように記録されてきたか、また記録が原爆被害者に対する医療的対応にどんな示唆を与えたか、に焦点を当てながら議論する。コメンテーターの岡田准教授は、そのような記録が裁判の中でそのように利用できるかを中心にコメントする。



- ◆ 2019年8月12日（月）15:00 - 17:00
- ◆ 東京大学 山上会館 地下1F 会議室002
https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/facilities/b07_11.html
- ◆ 報告者：Jonathan Reinartz（バーミンガム大学・教授）
- ◆ ディスカッション：岡田泰平（総合文化研究科・准教授）
- ◆ コーディネーター：キハラハント愛（総合文化研究科・准教授）
- ◆ 使用言語：英語（一部、日本語）

問合先：東京大学ヒューマニティーズセンター事務局
Tel: 03-5841-2654
E-mail: humanitiescenter.utokyo@gmail.com
URL: <http://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/>